

県立博物館 (秋田市)

展示・収蔵品より

# 美を知る

293

日本独自の神は恵比寿神しかおらず、他六神はインドや中国などで信仰されていた神や僧侶であった。

新年が近くなると、店頭などでえとや縁起物の置物などを見かけるようになる。題材はさまざまだが、福の神の集合体である七福神は、特に正月に多く目にする。

七福神とは、恵比寿神・大黒天・毘沙門天・弁才天・寿老人・福祿寿・布袋の七神をいい、その信仰は日本の中世期に成立した。しかしながら、

## 七福神の縁起物

# 宝船に乗って豪勢に

に敷く絵のことを指す。江戸時代には正月2日の晩に枕の下に敷いて寝ると縁起の良い夢を見ることができるとされた。初めは簡素な船に稲を乗せただけの絵柄であったが、次第に船が豪華になり、米俵や千両箱が積まれ、七福神が乗るようになっていった。

写真1は、県内で配布されていた宝船の札である。50年ほど前まで秋田市の太平山三吉神社で配っていたものだといふ。その頃までは良い初夢を見るために、宝船の風習が根強く残っていたのである。 「寶」と書かれた帆を高く揚げた船に、七福神が乗り込んでいる。恵比寿神と乗しげに話している布袋の腹が若干窮屈そうに見えるのは気のせいであろうか。

写真2は鉾山に勤めていた男性が生涯大切にしていた夢占いの記事である。1931(昭和6)年に刊行された雑誌の付録と思われる、所々擦り切れている。持ち主の男性は

写真4



七福神の土人形 幅24・7センチ×高さ27センチ×奥行8・3センチ

毎朝必ずこの夢占いを確認してから出勤したという。鉾山では危険な事故に遭うこともあるため、日常生活に常に気を配っていたという話を聞いた。

「男女吉凶夢はんだん」と題した表紙には、宝船に乗った七福神と、「ななきよの」とおのねふりの／みなめさめ

宝船に乗った七福神は土人形など縁起物の題材にもなった。写真4は秋田市内の方が所蔵していた土人形。布袋が正面におり、背後の毘沙門天は厳しい顔をしているが、どこことなくユーモラスに描かれている。かつて八橋人形を制作していた高松家に、この宝船と同様の人形型があることから、恐らく八橋人形と思われる。

七福神と宝船は別々の縁起物であったが、明治時代ごろから宝船に七福神が乗る絵が出回り、いつしか縁起物として定着していった。宝船の七福神が幸いをもたらし、良い年が来ることを祈念したい。(県立博物館主任学芸専門員・丸谷仁美)



写真2 夢占いの記事 縦19.1センチ×横15.6センチ



写真1 宝船の札 縦24.6センチ×横33.5センチ 個人蔵



写真3 宝船に乗った七福神が描かれた1912(大正12)年の暦 縦19センチ×横13・4センチ

